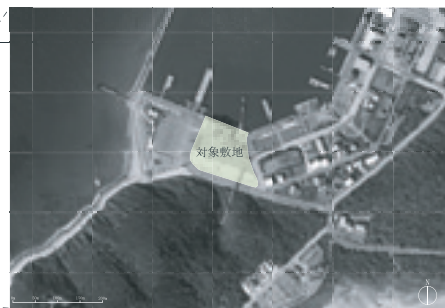


日常が非日常に変わる

津波防災・地域交流の拠点を兼ねる旅客ターミナル

01. 対象敷地

愛知県田原市伊良湖町。伊良湖町は、太平洋や伊勢湾などと接する渥美半島の先端に位置する伊良湖岬など市を代表する観光資源が豊富で、観光客が多く訪れる地域である。敷地対象とする伊良湖クリスタルポルトは、現在フェリーや観光船など海と陸を結ぶターミナルである。



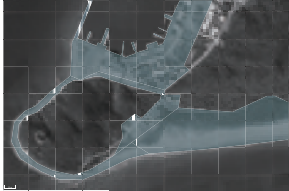
敷地周辺は、北側・西側にそれぞれ三河湾・伊勢湾が隣接し、南側は緑が広がっている自然豊かな場所である。東側に魚市場や複数の宿泊施設が立ち並んでいる。



02. 伊良湖町の現状・課題

・浸水被害

近い将来発生すると考えられている南海トラフ巨大地震による対象敷地の津波被害予測は、予想基準水位 5m。30 ～ 40 分以内に到達し、内陸部に深く浸水被害を与えると予想されている。災害時、災害後の人々を受け入れる拠点として利用可能な建築が必要である。



・観光面

田原市の中でも観光客数が多い、既存の伊良湖クリスタルボルトだが、年々客数が減少傾向にある。また、伊良湖町を始め田原市は素晴らしい自然環境や景観、歴史史跡に恵まれているが、情報発信が不十分で観光に十分活かしきれていない。地域の観光情報を積極的に提供し、その他の観光資源など地域を回遊させる仕組みとなる集客装置が必要である。



・地域住民

未婚化や晩婚化による少子化や、高齢者の一人暮らし世帯の増加を始めとした高齢者の増加により、地域の行事や運営などにも支障をきたす恐れがある。また、伊良湖町唯一の小学校であった伊良湖小学校が廃校し、地域で集まるのは市民館祭のみとなり、地域での交流の機会が減少した。地域のイベントを開く場や気軽に集える地域交流拠点が必要である。

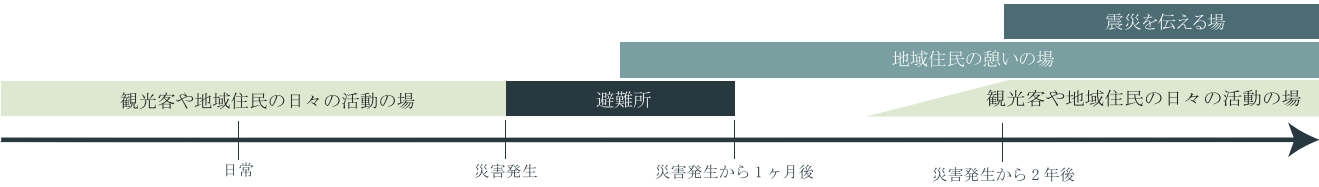


04. 設計主旨

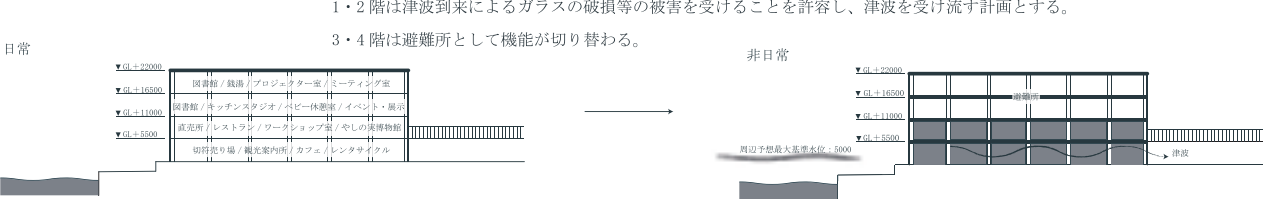
旅客ターミナルに津波防災と地域交流の機能を取り入れた可変する施設を提案する。

- ・ 日常時：旅客ターミナルや地域交流拠点として観光客や地域住民の日々の活動の場
- ・ 災害時：避難所として防災拠点の機能を持つ場
- ・ 災害後：震災の記憶を後世に伝える場

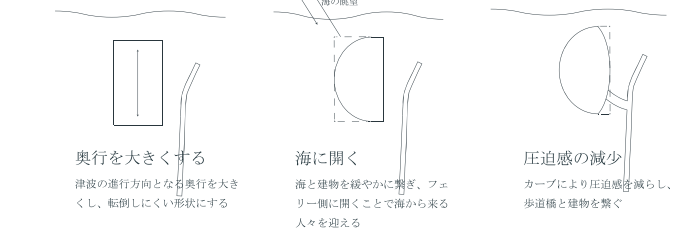
そして、復興後に再び日常時の利用形態へ戻る。伊良湖町の日常と非日常の暮らしを支える場を目指す。



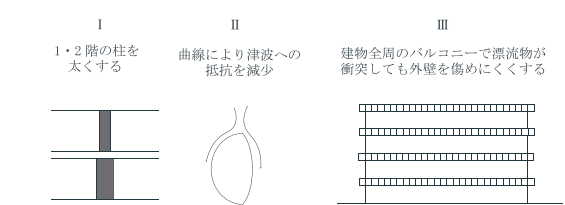
05. 機能ダイアグラム



06. 平面形態

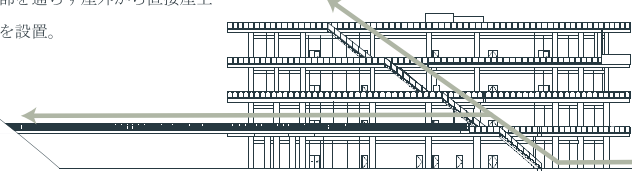


07. 津波に考慮した計画



08. 高台と結び

高台に向かう既設の歩道橋と建物を結び、避難経路を確保する。また、建物内部を通らず屋外から直接屋上まで移動できる外部階段を設置。



東立面図 1/300

03. 津波避難施設の現状

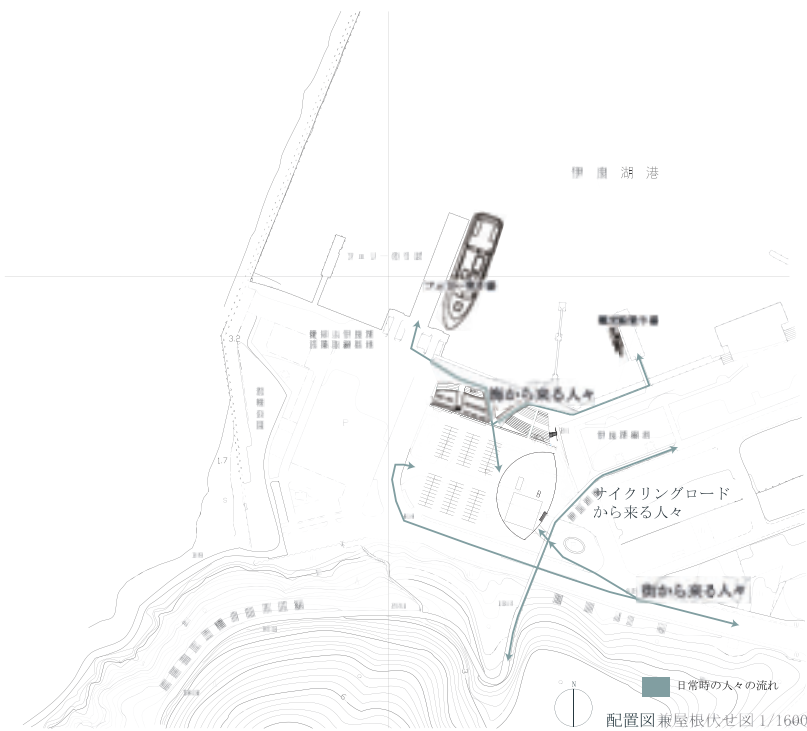
従来の津波タワーなど避難装置の機能しか持たない津波避難施設は、日常的に利用されることが少ない。そのため地域との関係が薄く、非常時に利用方法が分からない・地域住民に周知されていないことが懸念される。災害時には地域住民の繋がりや連携協力が必要不可欠となるため、日常時から地域との関係性を持つまちに開いた津波避難施設が必要である。また、観光客が多く訪れる地域でもあるため地域住民に限らず観光客の避難所や短期滞在を考慮した避難所対策が必要である。



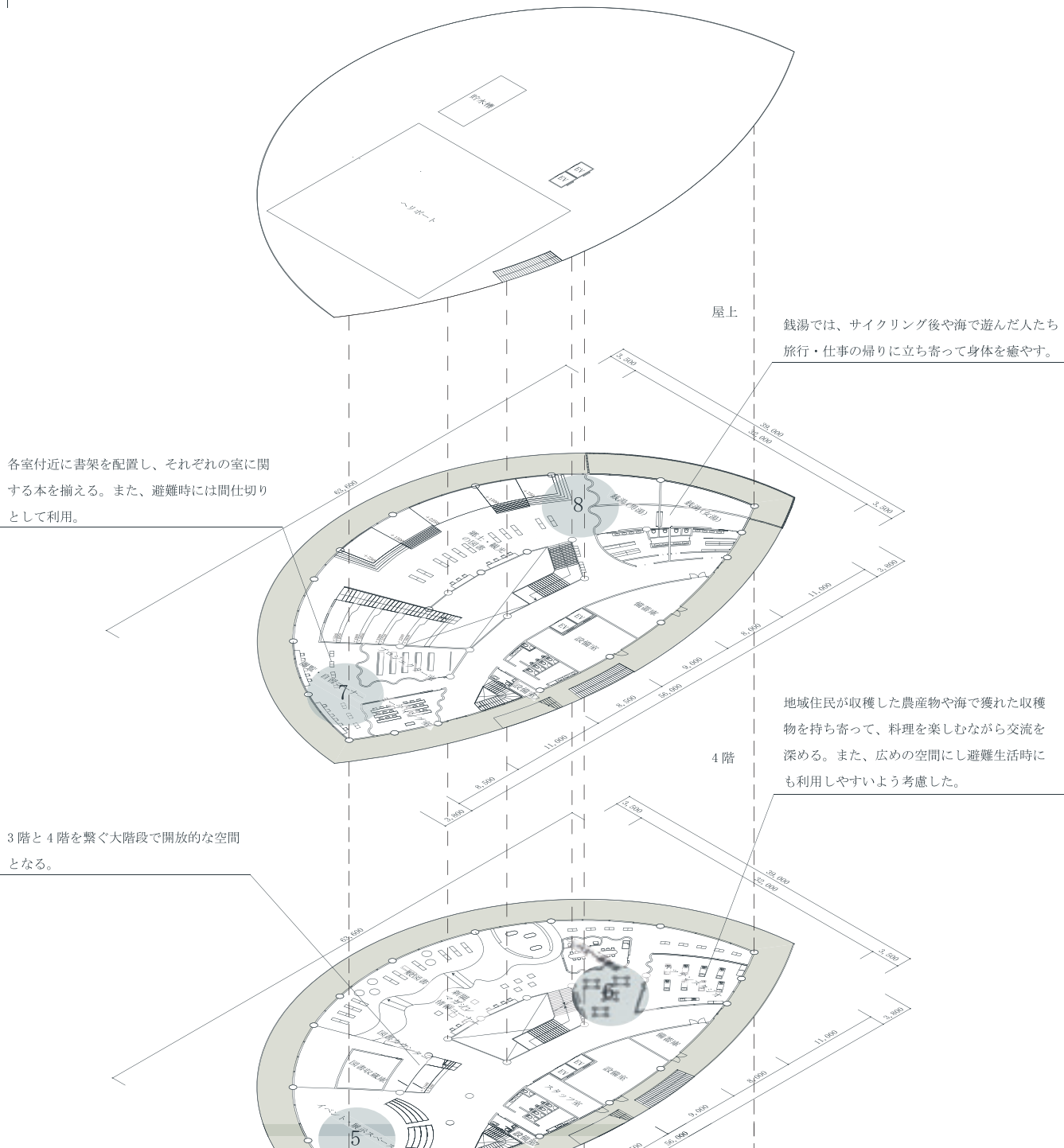
「津波避難施設」Google 検索

09. 配置計画

海沿いにデッキを設置し、海と建物を繋ぐことにより、フェリーや観光船の乗客を建物内へ誘導する。デッキでは、マルシェを配置し、地域住民・高齢者のためのコミュニケーションの場としても活用。



|10. 平面計画

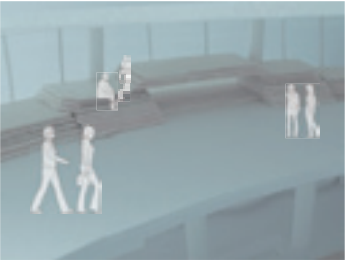


11. 災害時と災害後の時間軸による平面構成

発災当日～3 日後 （想定避難者数：360 人→200 人）		4 日後～1 週間後 （想定避難者数：200 人→120 人）		1 週間後～2 週間後 （想定避難者数：120 人→60 人）		2 週間後～1 ヶ月後 （想定避難者数：60 人→0 人）		1 ヶ月後～		2 年後～		当建物の避難者数の仮定	
目的	災害発生後、旅客ターミナルから避難所になる。本段階では、人命を保護することを目的とする。												
	観光客の避難者は救助ヘリ等で退所完了と想定し、避難所のメンバーは地域住民が中心に。避難所生活が本格化する時期であるため生活の環境を整え、生活の安定を目的とする。												
取組	・各スペースの機能を切り替える 例) スタッフ室→運営本部 キッチンスタジオ→炊き出し・調理場 ミーティング室→救護室 など												
	・避難者 1 人あたりの面積を 2 m ² から 3 m ² に広げる ・簡易ベッド、洗濯場、浴室など避難疲れを軽減させる空間をつくる												
4 階	孤立が解消されると想定。ライフラインが一部復旧し、地域住民の居場所と避難者数に変化が見られることから、プライバシーを守り、生活空間の充実を目的とする。												
	この段階では、避難者の人数が落ち、避難所のメンバーが安定してくるから、地域住民同士で交流を図れるようコミュニティの形成を目的とする。												
3 階	避難者は仮設住宅に移り、避難施設としての機能は閉鎖する。本段階では、地域住民の憩いの場の継続を目的とする。												
	地域住民の移住場所が散り散りになる可能性があるため交流スペースなどの住民が集える場の提供 ・定期的にイベントを開き、支援活動を行う												
・イベント・展示スペースとプロジェクト室が資料展示・映像で震災を伝える伝承コーナーに変える													
○地域住民 200 人 伊良湖校区の避難対象人数＝816 人 一定期間避難生活が行える伊良湖校区の避難所は、計 3 カ所ある。 (伊良湖市民館：収容可能人数 198 人 伊良湖シーパーク&スパ：部屋数 122 室 伊良湖ビューホテル：部屋数 147 室) 上記から一建物の避難者数を約 200 人と定め、当建物の避難者数を割り出す。 816÷(200×3)≒200 人													
○観光客 160 人 「田原市の統計」（令和 3 年度版）より 過去 10 年の内伊良湖クリスタルポルトの入込み客数が最も多かった年間 652,060 人（平成 25 年）から 1 時間あたりの入込み人数を求め、観光客の避難者数を割り出す。 652,060÷12≒54,338 人／月 54,338÷4≒13,584 人／週 13,584÷7≒1940 人／日 1940÷12≒161 人／時 よって、伊良湖校区の避難人数と対象とする建物の観光客数から、当建物の避難者数を地域住民 200 人と観光客 160 人の計 360 人と仮定する。													
避難者数の変化													

12. ヒューマンスケールによる空間形成

避難者の就寝に使用されるスペースは、オープンな一室空間だが段差や曲線の壁によって視線が遮られる。
体育館のような大空間に避難者が過ごすのではなく、分節された空間を設けることで居場所をつくり、避難者のストレスを軽減させる。



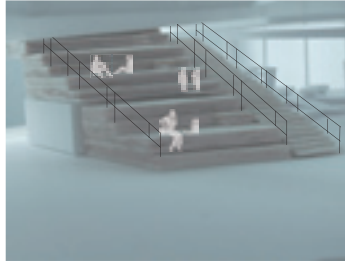
段差（4階西側）



曲線の壁（4階銭湯付近）



段差、曲線の床（3階西側図書）



段差（3階大階段）



階段裏（3階西側）

避難者数の変化	
発災当日～3日後	360人→200人 (救助ヘリ等で観光客の160人が退所)
4日後～1週間後	200人→120人 (残りの40%の80人が退所)
1週間後～2週間後	120人→60人 (残りの50%の60人が退所)
2週間後～1ヶ月後	60人→0人



4



3



2

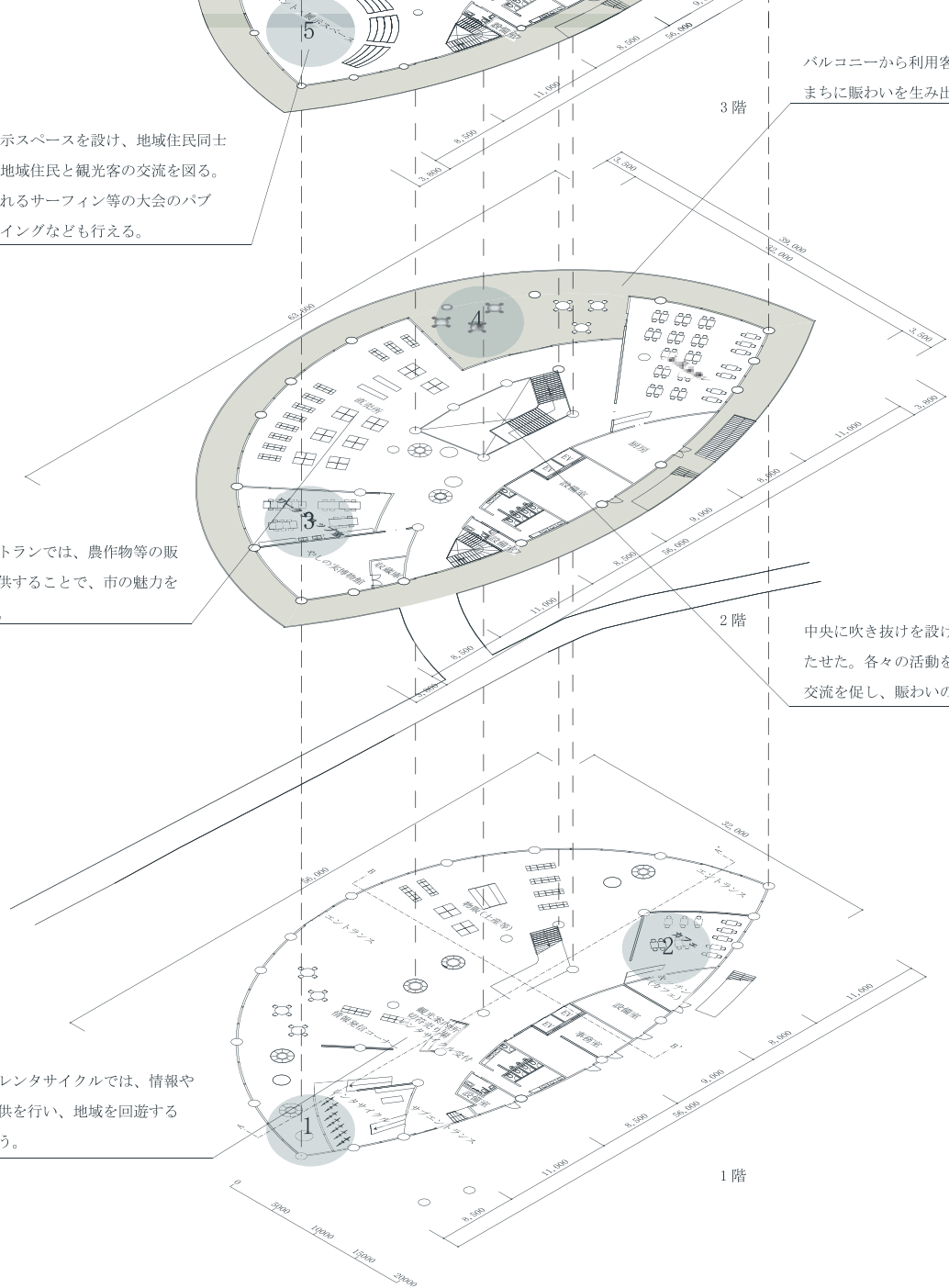


1

イベント・展示スペースを設け、地域住民同士はもちろん、地域住民と観光客の交流を図る。伊良湖で行われるサーフィン等の大会のパブリックビューイングなども行える。

直売所やレストランでは、農作物等の販売や食事を提供することで、市の魅力を感じてもらう。

観光案内所やレンタサイクルでは、情報や交通手段の提供を行い、地域を回遊するきっかけを担う。



バルコニーから利用客の活動が外へ広がり、まちに賑わいを生み出す。

中央に吹き抜けを設け、各階に繋がりを持たせた。各々の活動を感じることで人々の交流を促し、賑わいのある空間となる。

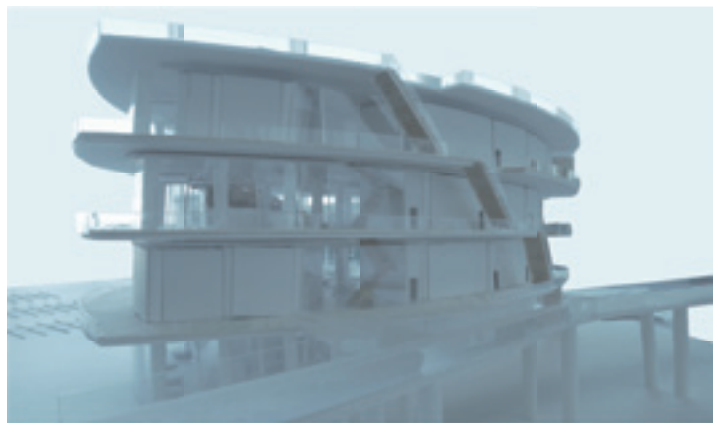


13. 断面パース



A-A' 断面パース

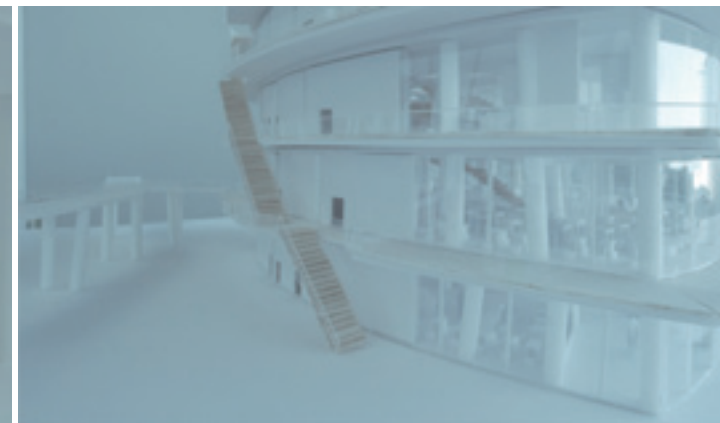
14. 模型写真



東側からの建物

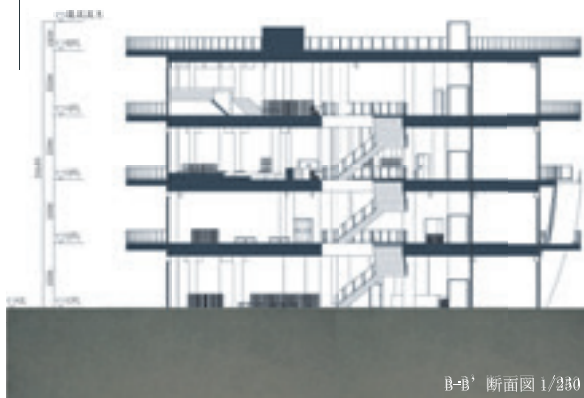


サブエントランス

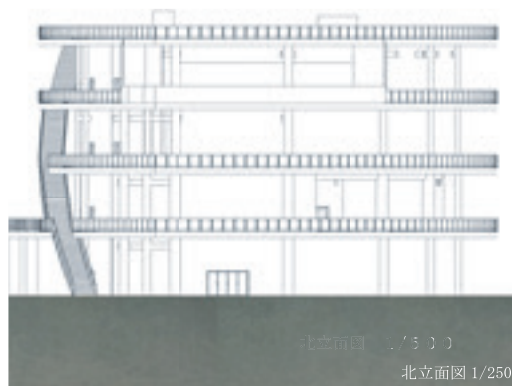


外部階段

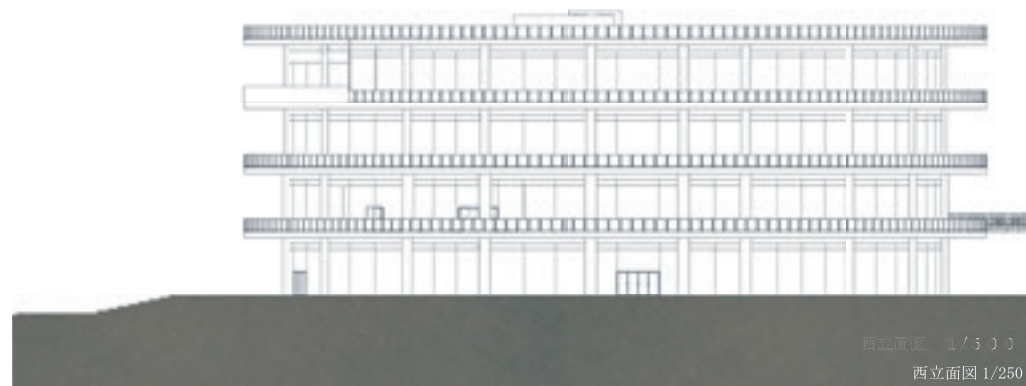
15. 断面・立面計画



B-B' 断面図 1/230



北立面図 1/250



西立面図 1/250